

施工の前にならずにお読みください！

施工の心構え

この度は当社の製品をお買い上げいただきありがとうございます。

この製品は純度の高い高品質なエポキシ樹脂を原料に作られています。

この樹脂の優れた特性を最大限に活かすために製造工程においても

十分な強度を発揮することを最優先した配合を採用しています。

この製品の性能を100%発揮させるために施工要領書があります。

仕上りにご満足いただけるようよく読んでしっかりとした施工をして下さい。

- ❖ 「施工の手引」を声に出して読み合わせしてください。
- ❖ 塗り始めるまでが肝心です。準備や掃除にしっかり時間をかけましょう。
- ❖ 今回順調に施工できたら次回はさらに用心深く取り組んでください。
(2回目に気がゆるんでまさかの失敗!というご相談を頂くことがあります。)
- ❖ まずは目立たないところで手のひら1~2つ分くらいの面積をテスト施工してください。

なぜ施工手順を守るのか？

手順をはぶいたり変更すると製品本来の仕上りにならないからです。当社では実際の現場に特別な事情がないかぎり、必ず施工要領書の手順どおりの作業をします。どれひとつも省略したり変更することはありません。

万が一、施工要領書に記載の方法以外で施工し、施工不良となった場合、大変お気の毒に思いますが当社では責任は負いかねます。

施工不良箇所の補修には新たな費用が発生することもあります。そのような事態をさけるためにも施工手順を自己判断で省略・変更することはおやめください。省略・変更したいときは事前に ご連絡・ご相談ください。

施工要領書の無断転載コピーは禁止されています

(株) 日米商会 TEL 03-3738-4410 info@e-nichibei.com

お急ぎの場合はお電話でご連絡ください。

かぶれ防止について

重 要

～施工前にならぬお読みください～

当社の製品をご利用いただきありがとうございます。

業務用補修材のため、身体につくとかぶれる場合があります。

材料を取り扱う際は**かならず手袋**を着用し、直接皮膚につけないようご注意ください。取扱に慣れるまでは時間にゆとりを持ち、準備を整えてから、塗るところ以外に材料をつけないよう慎重に作業してください。

初めての時にかぶれない方でも、繰り返し材料が皮膚に付着すればかぶれてしまいますので充分ご注意くださいようお願い申し上げます。

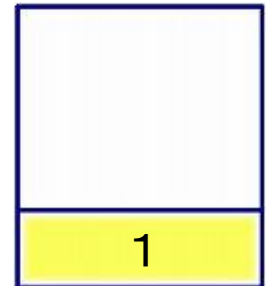
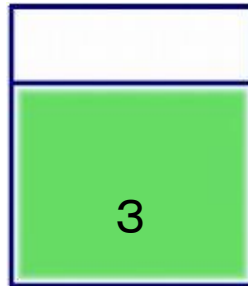
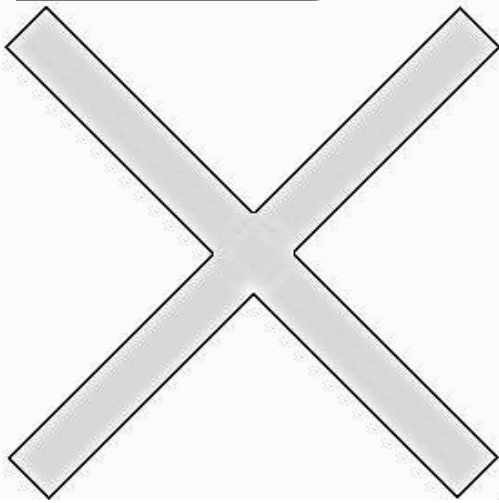
もし手や身体に材料がついてしまったら！

なんとなく手や服がべたつく感じがしたら、すでに材料が着いてしまっている状態です。ただちに以下の対応をおとり下さい。

- ❖ かぶれることがありますので、すぐにお湯と石鹼でブラシなどを使ってべつき感がなくなるまで（100%）洗い落としてください。可能ならエタノールで拭き取ってから洗うとより効果的でしょう。対応が遅れるとかぶれがひどくなる場合があります。
- ❖ 手袋をはめるとき、はずすときに手首に材料をつけないようくれぐれも気をつけて下さい。皮膚のやわらかいところが特にかぶれやすいので嚴重にガードして下さい。
- ❖ 万が一皮膚が赤くなる、痒みがある等の症状が出たらかかずに医師の診察を受けてください。（かくとどんどん赤くなり、ますますかゆくなります。）
- ❖ 主剤・硬化剤が混ざっていない状態で服や手につくと、いつまでも固まらずあちこちにベタベタとついてまわり、2次汚染の原因になります。
- ❖ 混合していない材料がついた作業服・手袋はもったいないですが、すぐに処分されるようお願いいたします。液体が染み出さないビニール製の袋に入れて処分してください。処分する際は絶対に素手でさわらないで下さい。

ビーカーなどによる

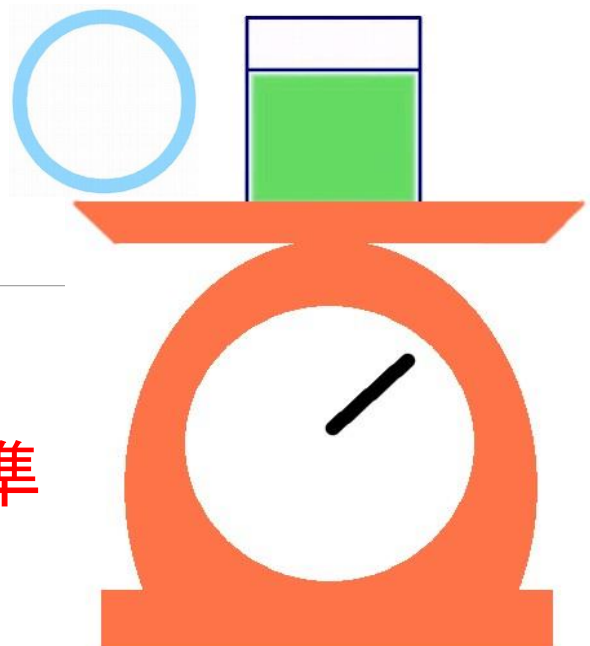
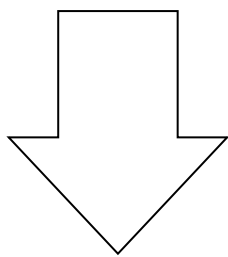
目盛り計量禁止



主剤 100ml と 硬化剤 100ml は
同じ重さではありません！

注意！この製品は主剤と硬化剤の比重が違います

見た目の量(体積)を基準にした目盛り計量は
硬化不良・強度不足の原因になります



計量はかならず
はかりで重量(kg)を基準
にしてください。

こんなに怖い！

下地処理の落とし穴

～あなたは「塗ればいい」と思っていませんか？～

下地処理が原因の典型的な失敗例をあげてみました。実際の施工にお役立て下さい。



失敗の実例1 施工後、すぐに塗膜がはがれた！

原因 汚れ層の除去が不十分

下地コンクリートの掃除がいい加減だった。コンクリートの上にホコリ・ゴミ・油泥などがあり、塗料が直接コンクリートに密着していなかった。

教訓1 下地の掃除はかならずする

下地の汚れは粗目ペーパー(30番)・ワイヤーブラシ等ですみまでしっかり削り落とす。掃除機でホコリやゴミを吸い取る。汚れがなくなってから粗目のペーパーや電動工具などで下地表面の研磨をする。研磨後は再度掃除機で仕上げ掃除をていねいにする。

失敗の実例2

掃除はしっかりしたのに塗膜だけがはがれた！

原因 下地表面の目荒らしが不十分

固くて平らな下地に粗目ペーパーをしっかりとかけなかった。または粗目ペーパーが水に濡れてぼろぼろになっていて下地表面を実際には研磨できていなかった。そのために下地層との密着力が弱かった。

教訓2 下地はしっかりこすり健康な面を出す

(コンクリート・タイル・旧塗膜等のしっかりしたきれいな面)

粗目ペーパー(30番)やワイヤーブラシで充分に目荒らしをする。
粗目ペーパーは水濡れ厳禁。
水分があるときはガストーチ等で下地をよく乾かしてから研磨する。

失敗の実例3

塗料がはじけ仕上がりがムラになってしまった！

原因 油分が下地に残っていて塗料をはじいてしまった。

液体状の油はウエスで拭き取ったが、下地表面に湿ったように付着している油分はそのままだった。施工エリアの上から油っぽいゴミやホコリが落ちてくる中で作業をした。

教訓3 油は塗料をはじく

液状の油はウエスで吸い取る。
下地表面が油で湿った状態のときはガストーチ等で乾燥させてから研磨する。
油ゴミ・油ホコリが落下する場所では屋根型(テント型)養生をする。

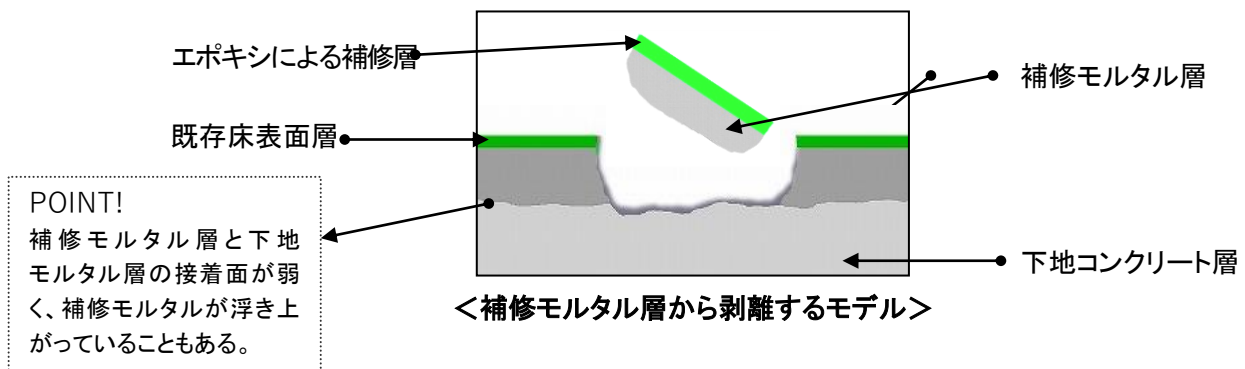
ときにはこんな例も・・・！

失敗の実例4

塗膜が下地のコンクリートごとガポっとはがれた！

原因 下地コンクリートが劣化していることに気づかずその上に材料を塗った。

コンクリート表面を見ただけで劣化がないと判断してしまった。一見するときれいなコンクリートでも実は補修モルタルで表面のみ化粧直しをしている場合などは判別が付きにくい。ハンマー等で軽くたたいてすぐぼろぼろにならないか、たたいた振動が不自然に広がらないか、下地の状態を注意深く、疑いの目をもって確かめていなかった。



教訓4 下地のコンクリートはさわって判断する

見た目のよさに惑わされない。
たたいた音や感触など五感を使って判断する。
固くて丈夫な下地コンクリート面がでてくるまで表面を削る

いずれの失敗例も下地処理に問題がありました。下地処理が成功のカギだったのです。

下地処理を確実にこなうこと が、せっかく補修したのにまたはがれてしまう「サイのかわら補修」から抜け出す大きな一歩です。

成功する下地処理とは

- ☑ コンクリート下地はワイヤーブラシ・粗目ペーパー(30番)・皮スキなどでこすって、こびりついた油泥などの汚れを確実に削り取ります。
- ☑ できるだけコンクリートの固くて丈夫な健康面が出てくるまでこそぎ取ります。
- ☑ 水分・油分がある時はガストーチなどで下地を乾燥させながら、汚れを削り取ります。
- ☑ 広い面積を施工するときは電動工具で削り取りましょう。食品工場等ではホコリが出ない集塵機連動型のクリーンサンダー等が便利です。
- ☑ 削った泥状のゴミは掃除機で徹底的に吸い取ります。濡れていると掃除機を使っても吸い取れません。乾かしてください。
- ☑ 欠損が深く、広い場合はハイパーガードやエポタフ R で補修してください。

結 論

下地が汚れていたらどんな高級品を塗ってもはがれます。

ゴミや汚れた水分が残っているとカビや雑菌・悪臭・はては害虫の発生源。

下地処理が適切なら塗料はばっちり密着。

快適な床があなたの日々の作業を守ります。

気になる点はお気軽にお問合せください。現場の写真を送信・郵送いただければより具体的にお話いただけます。

食品工場及びその関連施設で 取り扱う際のポイント

1. ほこりを出さないために

- 下地処理の工程で出るほこり・ごみをシャットアウトする時はテント型の養生を行います。
- テント型養生を行う際は送風機を使用し、施工エリアの換気を充分に行います。
- テント型養生をしない場合は施工エリア周辺をマスキングテープでおおい、汚染を防止します。
- 掃除機で掃除をします。ほうきはなるべく使いません。

2. においを出さないために

- 主剤・硬化剤は混合すると反応が始まりますので、すばやく塗り広げて下さい。
- 缶の中では反応が早まり、反応熱、臭気が発生しますのでお気をつけ下さい。
- 発熱、発臭がおきてしまった時は直ちに水をいれて下さい。
- 水バケツの用意をお勧めします。
- 洗いシンナー等の有機溶剤は屋内に持ち込まないようにします。

3. 衛生面から

- 白衣・ヘアネット・マスクの着用をおすすめします。
- 材料が手に付いている可能性があるため、作業中にドア等に触れる場合は素手または新しい手袋にかえてからにしましょう。

本製品は超低臭塗料ですが、硬化・反応にともない微臭が発生する場合がありますので、移臭防止のため施工現場での換気は充分に行ってください。